

## 抗原誘発好酸球性気道炎症に伴うカプサイシン咳感受性亢進に対するピルフェニドンの影響

岡崎彰仁<sup>1)</sup>、大倉徳幸<sup>1)</sup>、片山伸幸<sup>1)</sup>、笠原寿郎<sup>1)</sup>、藤村政樹<sup>2)</sup>

金沢大学附属病院呼吸器内科<sup>1)</sup>

国立病院機構七尾病院<sup>2)</sup>

【背景】特発性肺線維症 (IPF) に対する抗線維化薬ピルフェニドン(PFD)の投与は、肺活量低下を抑制し無増悪生存期間を延長する。IPF患者では健常人と比較してカプサイシン咳感受性亢進が認められていることが報告されている (Benjamin, AJRCCM 2003)。またPFDがIPF患者における咳嗽に有効であったという報告が散見される。

【目的】抗原曝露による好酸球性気道炎症に伴うカプサイシン咳感受性亢進に対するPFDの影響についてモルモットを用いて検討した。

【方法】卵白アルブミン (OA) で能動感作したモルモットに抗原吸入曝露を行い、PFD高用量 (300mg/kg)、PFD低用量 (30mg/kg)、溶媒を12時間ごとに計3回腹腔内投与した。吸入曝露48時間後にカプサイシン咳感受性を測定し、気管支肺胞洗浄(BAL)を行った。

【結果】PFDは抗原曝露によるカプサイシン咳感受性の亢進を有意に抑制した(高用量 vs. 溶媒:P=0.022)。PFDはBALF中の総細胞数・細胞分画に影響を与えなかったが、BALF中のPGE2、Substance P、およびLTB4の増加を用量依存的に有意に抑制した。

【結論】PFDは好酸球性気道炎症に伴うPGE2と Substance P の増加の抑制を介して咳感受性亢進を抑制する。